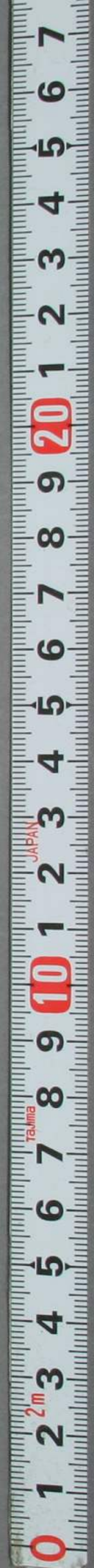




近世記美
 上

選 13
 1279
 0



門入13持
號 1279
卷 6

曲亭老翁著

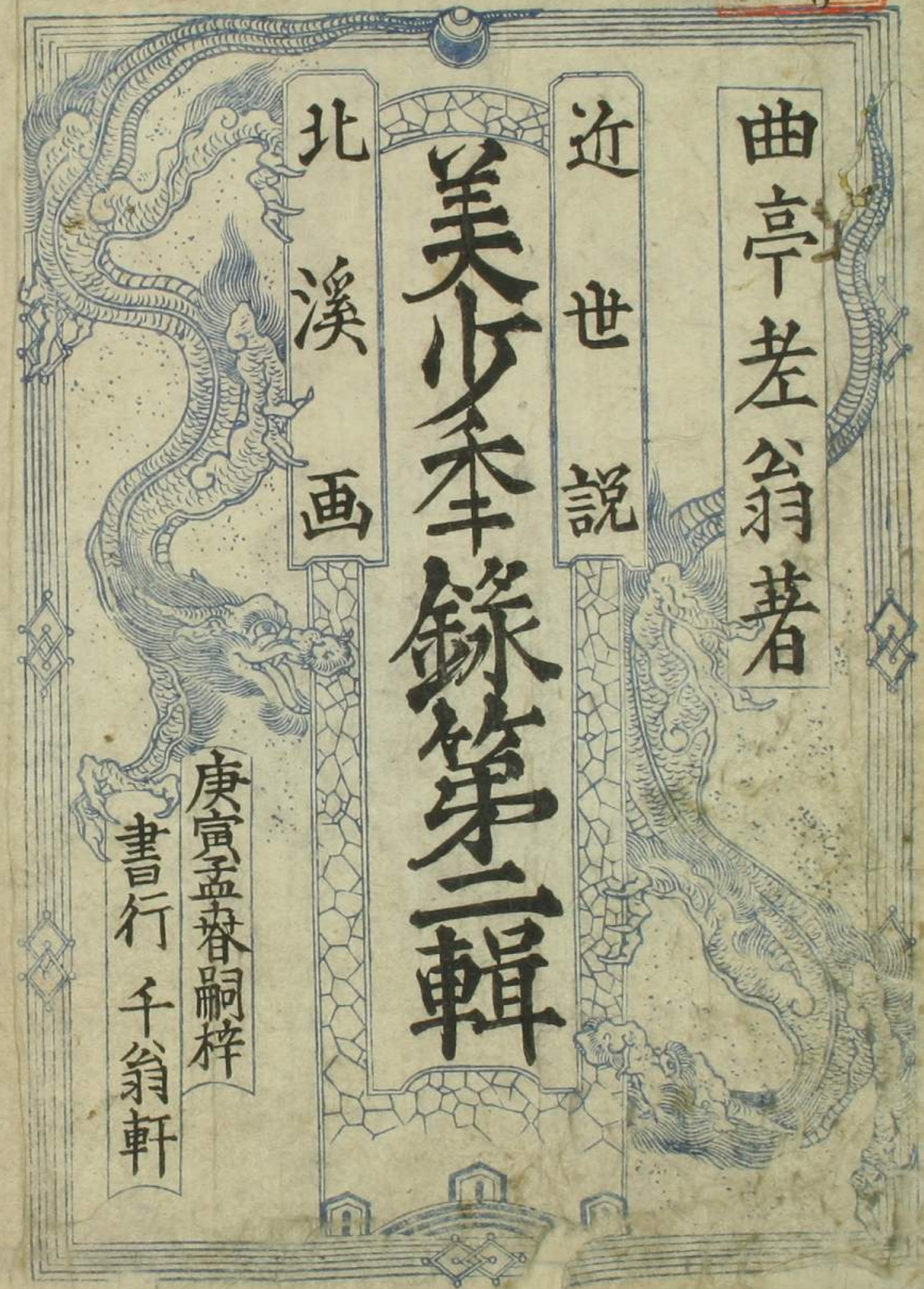
近世說

美少年錄第二輯

北溪画

庚寅孟春嗣梓

書行千翁軒



美少年錄第二輯總論螟蛉詞



博覽羣書尋故典旁搜野史錄新聞講談

盡合三朝格褒貶咸遵律令文按捺姦邪

尊有道讚揚忠孝削讒人零裁錦繡篇篇

好碎剪冰霜字字真春夏秋冬排景致風

花雪月按時新丁當擊玉敲金字剔透蟠

龍綉鳳紋壯似秋風吹戰壘清如夜雨上

松林助添豪傑英雄氣感激忠臣烈士心

美少年錄第二輯卷一

美玉浪金思巧匠高山流水待知音當場
告稟知音者忙裏偷閒試一聽自從神
代鴻蒙判生民一治還一亂政子治世天
地陂等持累葉綱常變兩倫島兔往來忙
五行正閏循環換忠良姦佞本無嘗上帝
分明有成算

文政己丑年小滿前二日杜鵑初鳴朝書
于神田著作堂
曲亭老人



附ての大約草紙物語の刺入画と看てその好む者ハ画の巧拙を論ぐ本文は意不
違ふと違ふると云ふ事ハ有り。縦の画は巧と云ふは蛇足の為の画といふは作者の画は拙は
のれは上稀なる故に予ハ画を童子にせしむるも。そ来著者物の本必らうと云ふは画稿の
趣畫者示しとて画をせしむるの事。然るに画の意をてを潤色せし外動もまれば本文の
意不違ふるは亦あらず。壁紙這書の前輯も。挿針の画中の中又その次なる巻の画も
いふもやめらるる。此の画像のありけり。とて。観る人ハ知るべし。一巻の二頁のハ。刺入
画は。如。況本文に至りて誤脱と正漏せるもの多し。總て印本のハ。誤脱と書せ画せる
もの多し。又板木師の刊送。鑄行るもの少く。是れと書肆のハ。誤脱と書せ。校し。果ては
出。後不悔。く。此の。もの。多し。巻々の心ハ。孰。目。の。讀。の。も。備。訓。を。考
つ。誤脱と看送せしあり。所を燈下の戲墨の。考。ね。春。夜。長。く。あ。る。惜。し
ま。小。冊。の。亦。書。籍。の。め。も。せ。の。も。多。し。み。つ。つ。と。や。か。か。の。捨。苦。い。ま。せ。ん。と。惜。し
よ。前輯の巻毎。誤寫ある。補正。く。の。下。第。六。冊。の。左。る。の。ま。れ。紙。記。を。見

近世說美少年錄第二輯總目錄十一回已上摠目錄見第一輯首卷

卷第壹

第十面

舊情慕西阿夏起行
遠謀警程福富分贖

卷第貳

第十二面

憂苦難訴泣俟歸帆
繁華易親漫事遨遊

卷第參

第十四面

垂柵橋客婦賣絃歌
侯鯖樓洛人認舊妓

卷第肆

第十五面

苦雨初霽殘花遇春
樂地不空赤繩更繫

卷第伍

第十六面

黃門察情艷童留西家
清蚊釋厄子母還故御

卷第陸

第十七面

一箇湯銚克悅國友
狡豎說利和季孟

卷第柒

第十八面

信讒道永誓變臣
秘怨尹賢陷香西

卷第捌

第十九面

茂林社惡少見捕
云石城叔姪再會

卷第玖

第二十面

享祿役君臣亂離
鷹捉山晴賢逐魔

本編所錄起大永二年壬午至享祿元年戊子歲凡八箇年小說
第二輯總題目完

中絶
兼藤卿



溫柔長者
風
不好言人
惡
雷
水

像寶第七
圖左蛇龍臨
寫真說見前
輯卷第五

栗
あき



五我
あき
長乃
あき
あき
乃高

離
雷

八葉賞像



福而

は乃あそ
 考乃いひ
 世を
 涙ら
 たえん
 ちの
 推し
 おふ

香西四郎左衛門尉
 元盛

大馬形賢

十卷像

7



處喜君 殘桃 媠侮

高野入道永

銅山私
 錢不抹
 饑

柳本彈正忠
 國友

像第九

7

扇谷修理大夫

朝興

像替第十一



造佛
本素
有漏
縁
千重
抛
無功
徳

如女来菴喝食

徳
無功
抛



芥純柄之果
なまこみ朽ぬらむ
松本よりやふ
思ひたはふ

思山尺

矢野宗好

松木の
芥

像替第十二

上のりる前輯の誤寫あり。それを校正して抄録するの如し。
第一卷の左の水泊水虎云云とある水泊河伯と字誤る。第二卷の右の俳仙ある誤
寫之當俳仙作る。○第三卷第三十右の行同卷左の薩埵の推と誤る。
卷第十右の薩埵の推又同卷第十右の獨女の傍訓ひも誤る。○第五
卷第十右の薩埵の推又同卷第十右の獨女の傍訓ひも誤る。○第五
卷第十右の薩埵の推又同卷第十右の獨女の傍訓ひも誤る。○第五
卷第十右の薩埵の推又同卷第十右の獨女の傍訓ひも誤る。○第五
卷第十右の薩埵の推又同卷第十右の獨女の傍訓ひも誤る。○第五

近世説美少年録第二輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第十回 舊情西を慕ふ阿夏起行を

遠謀程を察言めく福富贖と分る
復説福富太夫次への膏阿夏珠之女ホを歎待く黄金が愛する五色の玉に
来歴と説示一語次小獨子。太夫五が性方もある。
嘆息もする一の妻の屯倉の娘阿鍵の林示め難く涙の淵小屯倉を隠ら。
喃阿夏とのとこへ過世ありて初解て初對面より恥くも哀れむ。
吾兒を答ふる小あらねむ。大夫五のこの来酒の嗜む色も好む。
るりの相応に武夫の技の航りて活業の懽りて多々公の一勸解の
意見も聴ゆる。追牛なる今で後悔況や吾侪が心の中自然と精一の。

西の東の戦ひの絶ぬ世に立んとく。武家の仕へられぬ。修羅の街に死を
 争ひの較むれん世に。疾の肩を。鄙語の生兵法に現大疵の基を。悔しく
 此の懲もせん疾のれり還らざる。あつたを麻環の線返ら。おと親の心子に
 細く。あつた疾の落塩草の口説き益多。とせよせん鈍う。とひひひ
 目を押拭へ。阿健の涙を。うらみく。つら。丈夫の性。り。その小動の。も。既
 過死の二親の。仙兒の子の。も。也。他処の先陰を送られ。や。慥ぬ。も。昔
 里の宿の檐下の。近。死。て。人。を。憑。み。く。賠。話。も。せ。天。も。雁。の。翼。も。け。ま。ま。信。信。え
 ぬ。今。諸。州。小。君。と。傳。く。新。関。守。小。留。め。られ。心。に。任。せ。る。多。ん。然。と。恙。も。不。忍。
 深く。も。屈。ひ。も。いと。慰。身。も。安。ら。ぬ。胸。の。痛。の。も。瀕。る。厭。き。憚。り。孺。子。の。袴。
 皂と苦勞の真身衣汚れぬ。え。ぬ。媳。姑。の。美。過。く。あ。れ。阿。夏。と。と。れ。を。う。ち
 使。く。と。う。づ。不。足。ら。ぬ。り。も。わ。く。いと。優。き。方。ま。る。も。盈。れ。が。虧。け。浮。世。の。自。然。御。ろ。れ。中

俗小人の
 女官の敷
 以娘
 古人の小
 娘
 訓せ候
 れり唐山
 忠人の女
 を娘と
 の異

推量られくいと痛く。も。ひ。ひ。り。介。子。も。父。母。君。と。妹。使。の。中。又。遠。離。く。い。つ。も
 外。小。と。ま。死。況。ゆ。も。愛。々。娘。ま。の。ま。い。も。心。つ。も。事。に。そ。も。一。目。
 千秋と。御。の。空。あ。く。暮。く。思。召。死。該。る。う。う。と。奥。ま。の。宣。ふ。新。関
 る。留。め。られ。ぬ。ゆ。も。似。出。と。り。然。ん。ぬ。速。れ。還。せ。ぬ。ぬ。あ。る。別
 れ。も。又。あ。い。の。示。も。不。悲。糸。妾。良。人。七。稔。前。小。人。敷。な。れ。世。と。逝。り。け。ん。
 と。警。敵。も。自。滅。し。と。怨。齊。け。る。い。の。身。に。と。禪。見。と。養。育。艱。難
 幼。勞。と。推。も。量。る。も。命。終。ぬ。京。師。小。住。不。可。と。鎌。倉。も。此。の。由。縁。と。心。あ。く。不
 起。り。侍。り。さ。れ。年。來。世。の。乱。れ。も。送。不。音。耗。絶。れ。今。も。る。は。恙。も。く。彼。処。に。あ
 秋。あ。ま。る。落。着。か。ぬ。旅。宿。小。侍。の。西。國。珠。之。成。が。父。の。叔。父。侍。れ。る。路。遠
 けれ。訪。す。由。り。か。う。夏。く。形。を。身。の。身。比。に。あ。る。は。傷。心。の。ゆ。も。涙
 さ。また。他。の。敷。不。復。袖。濡。ら。ぬ。倉。阿。健。共。侶。不。歎。息。の。外。も。中。に

大夫次のはくと雪果く噫女中へも優て薄命る人らたの鎌倉る由
縁とやうな疎遠で過せうるの遙々索して赴くもの今も思慕するは其
外も測りあう且今茲去歲より寒氣は一入早うも遠くをて雪の降る
下身彼のつぐ女中の長旅前路と急が後悔ある春もあつ返道とやう寛
あふ赴かへる月詳の翌相譚ん要る身上的話して人を泣かせる噫れ
るが愚痴知るの息子の睡けえそる母れも労れをあらんを心まゝ夜深ぬ
そく臥房へ入るあつとあつ倉の後方侍婢とそる東のく多編室の阿
客の臥筆と儲てわん安内とせむと分付まへ阿夏馳るあつ夫婦と阿健黄
金の恭く然りと速く珠之入と急く侍婢引れ臥房の赴けり却説
阿夏のあつむも這福富の資とあつあつ返留る程の次の日も屯倉
阿健の懇小阿夏母子を慰め放遣るものあつ阿夏の心もあつ御小ある

去小同れと死鎌倉る由縁許りんとあつの當座の慢語彼外小所要るあつれ
との京師とくも憑死親類もく友もあつあつ夜の夢もあつあつ聖の
示現小親子が厄の釋もあつ故御あつあつと宣ハせと今ゆら且くあつあつ
弟く春の中もあつあつ周防もあつあつ伴侶のいであつせんも亦測りあつあつ
慮の既最所あつ御佛の引接小件奉る小優とあつあつ尋思とやあつあつ
あつ夫婦の機を執るあつ倉のあつ阿健もあつ且暮坐邊小掖著て辭敵もあつ
たりける然程小珠之入の這家の寄食見る就鴛津川作日高景市との西箇の
総角小對面せと朝より相驩と太くあつあつ然も年来深山の孤屋小生
云て世の中もあつ疎り小あつ豪家の客もあつ視小觸るもの耳小聴くは
珠るるあつあつといふあつあつ日毎小遊戯れくあつ友垣を締むあつあつ山賊小
養れる秘事の後もあつあつあつあつあつあつ今茲も冬の中あつあつあつあつあつ

三金二車一

都鄙も人の親いその子の為小著袴鮮紉を唱へ方社詰の祝壽あり言
 るる有伏しと驕る人の習俗され大夫次屯倉只豫てより黄金が鮮紉に
 准備小と京様の衣裳綺羅と盡く裡衣までも流行を旨と成るる金の
 見玳瑁の櫛ひはら京様より購求り物整むとの事あり如之而十五日の
 少が黄金の裝飾りと城隍廟の参らせ少少里の衣々をち巡らせ光景の後
 者さ小華をさるる人食目覚くといけりこの折ある大夫次は御宗五色の玉の為小
 遠近とる奔走する村人ホが軒別の餅一盒を贈りたる中宿六を酒宴の
 席未の招きもさるる織布一及と牽出物ゆをさるりけるある一事西用ひて
 の比阿夏と案内致し辛苦と勞さく又一の這回黄金が鮮紉の祝義を
 との知るる又誇負の錢ある人の費を數めてめさ古又も吝るれと勢利の附下風小
 ありがる世の人の情るれ鄰の化貨と數るる美次とを先議るの稀を愛す

この三稱へり是より先の大次次屯倉阿健と相譚さるる前々酒宴あり
 鄰村の鼓音女ありて筑紫琴とせり招きとる奥を添へ近曾彼鼓音女を
 うくはる技とまるののる黄金が為の財を惜まぬ物物の整ひるる君の
 酒宴の管絃の準備るをのせんむ平新皇將が相馬は内裡と造り
 時諸司百官を置れ小曆日博士のさるりたる心地をさるるの段の
 るるはとら戯れて潜め死回へ屯倉も嚙々とうち笑ひく阿健は何とある
 中ん華洛人の貴賤たる遊藝と目とるれ近比より弄ぶ弦とらあいの
 まら彼処へそ流行したとの実言であらむもさるる阿夏女郎の然る技あり
 疎くもあら故郷の京とてさるる小只今召く問ひやとのよ阿健の有理と成て既小
 立んとほ程の阿夏のめと考るる朝化粧とてさるれ大夫次屯倉の合笑
 から坐邊へ招き近つて緯云云と説示倉卒ととめられんがめん月の必管絃の貯

金二車巻一

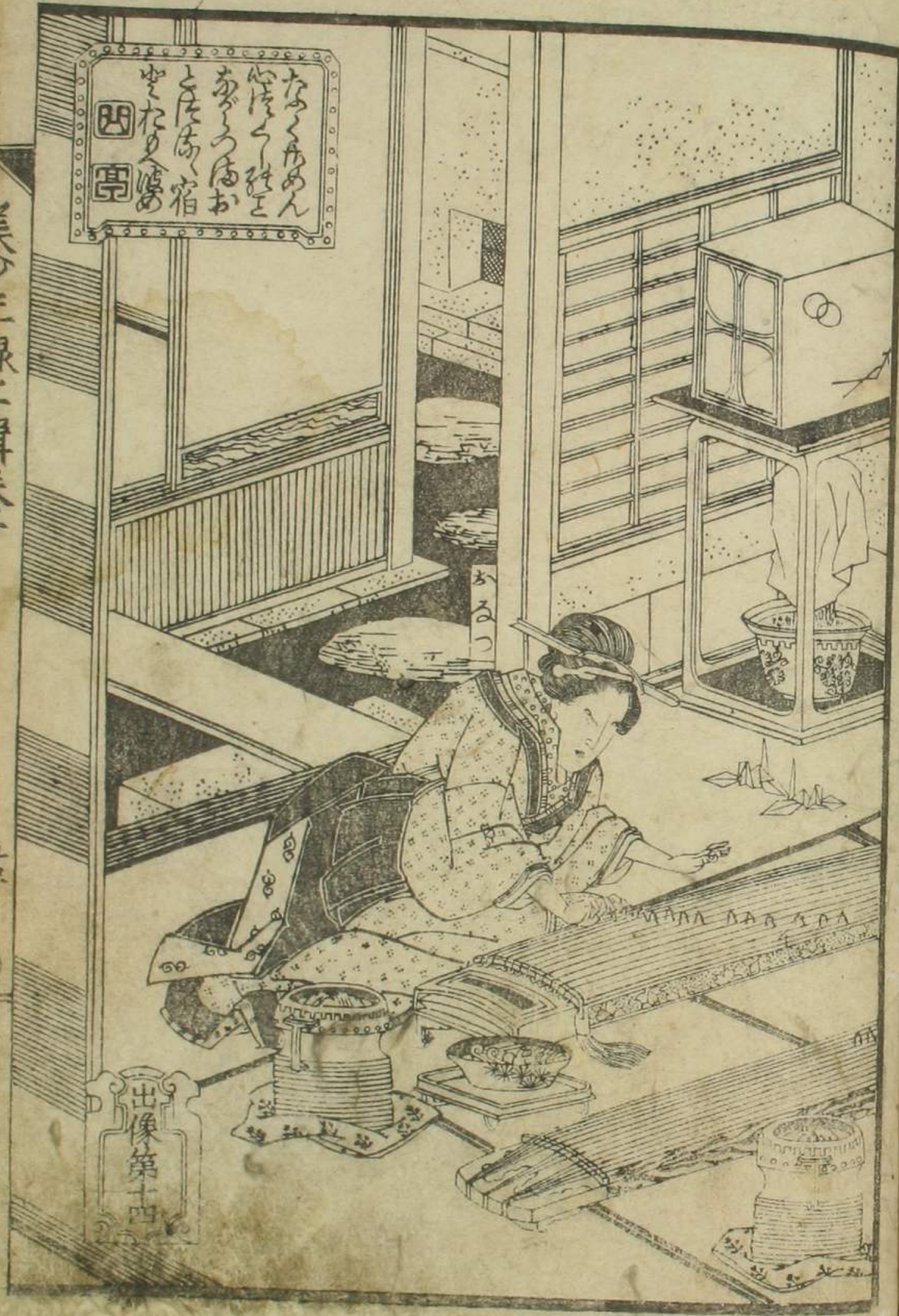
十

其藝のなるるらん羽衣の黄金が解切の壽延の客と聚合く賀酒を酌んと欲せ
 願ふその折一曲奏でく酒宴の具を添へて田舎料理も光を増てあつたのさう
 達もあつた幸ひあるらんかこの愛を頼まうは彼三強のなれども琴の大小二面あり
 鼓もあるれば好ま任と出置入美引めと他克もあつた入弁一請求る阿夏の
 宿り合笑く定は推量せられ如く糸竹の技のいも穉時より習ひを久し捨て
 ゆるいふ心のこるはるら頼せぬ黙止があり祝祭奉そとつれ寝緒はるら
 断りせんとくは準備とあつたとのさゆりて皆飲ひてふ又合せたり却説は日の
 晡時より五人合保の村長ホ優得の百姓牧士馬買福富親類の男女も是
 彼来れれば儲の席を聚合くと前段後段と美味を盡せ御食餅の種々あると
 ぐいあ具あつた男客あつた大夫次女客あつた屯倉阿健が薦ぐる不景二度
 と巡る程小冬の日もあつた暮春果て処陟まると点く燈燭の花も亦愛く登時あつた

大夫次の席の首中膝を進め袴の極と左右へむらさ扇を扇ふ声あり立て
 諸君送る聚合せめて黄金を祝ひめが斯開し夜飲ふ及りの辱く飲
 一限のあつたゆめ然とささる数待るゆめ及せぬけ旅屬京より子推乃て
 ちの地と過る旅の婦人を以てと置置る糸竹の技の疎らとて皆のそと其の
 本事を知らねども後陸の女見ゆからとてそとあつた一曲聴せぬとつた
 坪小入くとの興あつたゆめか叮嚀するあ管待物足りゆめ又京女郎の調子を
 聴く錦の上の花を添る意外の快樂るゆめと促と膝折直く俟程阿
 夏の屯倉を取る新し夜いろ被て奥のより玉く来る衆人あつち對て言を述
 安否を語るのいひさる愛敬つて客と前羽さぬ進止の舞子の餘風頭れ花の
 後れても初樓より有あつた吉野の高峰小立顯れて五節の袂を翻しけん天津少女の
 姉もあつた三種の浦曲小天降りて彼羽衣と松の掛る玉女の果敢と驚あつち村長

豪農牧士ホも猛小貌も更めても訛る声音も笑れを應答まら殷勤小苦
 薩を拜む心地せり當時阿夏の後方小措れ筑紫琴を推直して持柄の指の運び
 細小川の瀬を渡る蟹の歩も小彷彿うり節奏緩急を度不稱ひ且祝言の組
 唄を声妙も歌ひ果て酒盛の間々小京師で流り柳節を凡音高く歌ひ聴か
 むふとある熊野道者欲笠を挿る柳の葉と繰返し又々返まされを席上生
 醉の呂律廻らぬ管も巻れを雜譚閉口水滂と共流る感涙を暖揚々言たり
 阿夏原尾歌妓の容小熟する昔の杵束粉挽歌を甲舎見の機と執る調子あり
 あり琴に合し果し又扇拍子も浮き舞う藝多様の容あり下素人同志の膝舞踏
 犬居牛飲狼巻肩腹立て献々と数献果る乱酌酩酊奴婢も散動て幾遍とく
 腹を抱へ笑へとも鶏の毛を啼く八声の比酒醺や酔果小なり衆客有一辞
 去く初て風の凧をよく樂竭て哀來る尚已時る幾十思宴の席薦の酒は

活されて晴蟬燭の真影の時小落しけん鹿見斑毛小焦るるあり況庖厨で取
 りとち推たる枕硯小鉢の基も留めを林塔へ放下してそるものあり仕
 恃て入るとは恃り出自然の勢ひ富る家ゆかぬの世ゆも又まのこ。同話
 不題その次の目小大夫次屯倉阿鍵ホの齊一阿夏を労きその音曲小提れを
 誉るると大くさるるどが中屯倉がひや。死の凡立目の妙るる。あれ程まぐ小
 あらんとけけもものける。現況水の塵も際去く江の鶴も檐小来まけし声とのひ
 節らひ如此其藝者の京鎌倉ゆも情多るほくもむむめ。いふ黄金小教て云明
 年ハオオのゆれ。切小曲子の三四章も習得するのゆひ。あらゆる然る師
 匠も頼れ他事も。阿鍵は共小勸めく己が一人のあらし。情
 ト。阿夏の微笑も。宜小不測のそあ也。今茲まのふれ竹の子。又親さるる
 とも。杖を駐めくはるる。小陰も。あけ。然るるの。報願。願。



出像第十四



ほけれ吉言と擇まぬ所。よす領へ娘姑を教へ給ふ。此の御書に、
 閑て下段より糸竹の技に、寒松言古よりいふ所あれ。君より教へ給ひて、
 余あれらのよし、彼等知らしめ給へ。さういふしよ、
 致相似る大夫次、さかしの目より。急ぐ阿夏を師匠と稱せ、
 子の部屋と定め、数待目を示倍、却説今茲果敢多く暮る、
 旬一日大夫次、中倉と共、阿夏珠之次と招きよ、茶と薦め、
 傍ら東四の軍の勝負と説、夜語次、大夫次がさう、
 豫て春中もろく、鎌倉より由縁許、詔りしられ、
 軍の絶む、所も然る、遙々赴く、瀨下に雨漏り、
 身の日精進、精進法と管へ、小切に二と三之程、
 此の御書の、他外は、よき事、よき事、よき事、

たる春想、まゝのヨメ、
 この議、小従ひの、と、小屯倉も、
 与んと、と、と、
 今中、便宜の、
 欲、周防、
 遠、その、

再離の戰、
 阿夏、
 阿夏、
 阿夏、
 阿夏、

此の御書の、
 阿夏、
 阿夏、
 阿夏、

今中、便宜の、
 阿夏、
 阿夏、
 阿夏、

欲、周防、
 阿夏、
 阿夏、
 阿夏、

遠、その、
 阿夏、
 阿夏、
 阿夏、

けとく固辞ハ恩を知らぬ小似らぬ娘さるの器用多一兩年の程めく奥印可まは
 おらせんと豫て思は朝夕ふあをを用ひるを煩て教おわらせうけふ末まで遠く別
 れを妾も本意をくさるらんや今茲思ひ留て仰小後ひはる然とも子を推しよ
 まる求まると願ひの成るは且珠之双を頼まるといふは然屯倉より大
 夫次ハ幾遍とるうち領たう合笑くおん身のを了簡宜ふよりあふの月初午より
 息子を傳燈寺へかへく瓜作景市ホと傳ふ習讀書と學りませ下あの子ハ今
 茲十才あると云や老年比より童と遊て之を置くのふ吾侪小任しぬはと正
 首小相譚し老る人の癖るれども心せりてその日老僕を黄檗山傳燈寺へ
 遣と珠之双を教育の支の趣云云と住持を憑きまうけりこれより大夫次ハ珠之双
 習の机硯の類より実語經を購求めく準備も教果程は初午の日あるり
 大夫次ハ珠之双をぬきみづから件の寺へ赴死則住持小對面と束脩の沙金一兩を

進ませ瓜作景市ホと傳ふ教育のふとのさうま住持ハのり異議を大檀
 那のふあれ快く美引く貧道藤りらん心乃ふ志教道すはの貴意
 休れと心と茶を薦め果子と羞めく他事多欺待ふいらの故珠之双ハ
 稻荷祭の太鼓も打むその日と本意を消せ快らびどもさあははあど
 ば詰朝より瓜作ホと共に傳燈寺へ赴死住持のふ本を賜て安積山浪速津の
 歌よの習ひ初めけり阿夏ハ是等の恩義を感とていままま実を入れて黄金を誣
 える只この技のさる結髪化粧何れと黄金がら他小被を嫁母のてりさせ
 るこれを然大夫次屯倉阿鍵も共小珠之双を秘首古のうあ物を惜ま紙おれ筆おれ
 乞ふよ任して錢を取らして買せふれば瓜作と景市の去歳の春より習入りして流落
 為小師兄るれ勢ひ雲壤の差あふ似て遷り珠之双は筆と世貴の紙は母見を然
 の日毎々小連立く傳燈寺へむけけ然程小珠之双の件の寺へ赴死住持の教

受る。下とせあまのふなる。随は初の程を慎み多習讀書。小実をいれ。後山を
 為く。急を住持の教訓を物とも思ふ。凡作景市をそのり。動もそれ外小く山小
 遊ひ水の戯れ。已が随小奉動ふ。住持小報る。のあれ。皆是大檀那小由縁。総
 角小る。もて罵りも。懲りも。あま。沙弥。喝食。も。の意。を。ゆ。て。做書。の。折。小。凡
 形。して。その。上。を。甚。書。写。せ。し。も。應。美。美。の。高。点。許。す。の。め。て。宿。所。へ。の。て。帰。り。多。小。大。夫。次
 屯倉阿夏。ホ。ホ。で。め。る。べ。と。と。あ。ら。む。く。の。上。達。と。感。と。已。を。折。々。小。の。説。話。と。件。の
 做書。と。を。存。し。く。六。卷。の。の。る。る。り。有。如。之。程。小。珠。之。次。一。日。凡。作。景。市。ホ。と。傳。燈。寺。に
 庭。小。遊。び。て。潛。小。譚。小。や。吾。子。ホ。何。と。思。ふ。今。今。戰。國。の。世。小。生。れ。て。多。習。學。問。何。小
 せん。願。小。所。小。馬。兵。法。真。義。を。送。る。極。り。小。運。小。衆。と。一。團。一。城。の
 主。も。も。昔。源。の。牛。孺。九。の。鞍。馬。寺。小。あり。時。夜。を。出。て。彼。山。小。木。石。と。敵。小。て
 自然。小。劍。法。を。煅。煉。小。平。家。を。滅。小。る。小。世。小。志。氣。あ。る。の。の。身。小。と。て。右。の

今吾黨の總て三名あり小遊戯れ徒小日を送らせり。必武其勢の試敷と
 共小青雲の足代も。後小悔めん。縦師匠へあまも。一心凝之。懈らば。何
 て。牛。孺。小。ある。死。の。誰。何。と。言。ひ。凡。作。景。市。終。小。あ。る。微。妙。も。の。れ。れ。凡
 哉。俺。們。小。素。武。士。の。子。小。馬。家。業。の。も。ら。不。幸。小。親。を。喪。ひ。孤。と。す。り。も。農
 家。小。入。と。る。を。死。を。と。朽。を。く。思。ひ。よ。の。企。小。本。意。小。稱。へ。然。下。小。准。備。と。ま。け。れ。と。山。の
 樹。を。伐。下。竹。を。研。く。鎗。と。木。刀。を。製。作。と。試。敷。と。上。日。と。あ。る。の。只。一。子。日。小。あ。る。も。こ。小
 山。蔭。林。の。中。也。方。丈。も。所。化。寮。も。の。間。近。と。住。持。小。法。師。們。も。あ。る。と。い。ひ
 ひ。も。け。素。素。も。遊。遊。を。常。小。ま。る。然。角。小。の。り。れ。れ。小。机。小。倚。り。小。稀。る。と。怪。し。め
 る。の。け。や。の。れ。り。と。珠。之。次。小。誰。教。る。小。あ。る。と。日。も。月。を。累。小。試。敷。小。小。小
 る。と。る。れ。れ。も。登。小。自。得。と。此。彼。迭。小。優。劣。あ。る。中。に。鎗。小。凡。作。小。及。小。の。小。殺。小
 劍。小。景。市。捷。小。珠。之。次。小。組。敷。小。の。三。偶。勝。と。攬。る。と。あ。る。の。の。餘。の。技。小。集。小

及びと朽をくもひを氣色ゆ頭さ獨つら深念をまふ吾其深山の孤屋ゆく
養育せられたれば嶮岨の奔走自由且年七ツハッの比より半三を馴し七也をも
射つ鳥を射く射藝を自得あれどもあらぬけりさ竹前を大門のあらなる関
羽の廟の内ふてぬめりさ竹前を楓る人の奉納せらる折もあらぬけりさ竹前を
本事をせん志とゆめのら便宜なれぬ作れぬ景市ゆめとゆめとゆめとゆめとゆめ
表話不題凡作の一日珠之双景市ホと試験の折に相譚さる俺們の這西三年
武藝不心を未女ね申斐小大竹條の良自得をれ馬士の術のまご知らまの寺の南を
山登野とい地方の牧の雛駒といふらあつが翁をいふの牧もあり他領の牧も合
養うのそ牧童ホを誘へ馬小兼習のありろろろといふ珠之双領をてを究竟の
計較に鏡劍法之士卒の所為のさ馬小兼習の誰りよ大将の任小當らんとその
牧(あててんといふ)景市推林めとや不覚ゆる早りあひを彼野の他領と合保と

且俺們の自由あるを縦吾翁の馬子とも人の騎るを禁せられてを成依牧童
菰屋に在り何で貸て乗せぬといふ凡作頭を傾け然りと乗らぬもあらぬ何の
日あり馬術とせせん我今一つの計あり彼牧の童ホ小錢を取らせ酒を飲して相譚々
這事成る一とるりふと錢をけれせん術もあらぬと珠之双宿のまご知らまの寺の南を
休む任一と箇様々々ふら母とよありらる錢をゆつての誤誰何と長た示
其凡作景市もと林鳴らんとその計畧極め妙とくね氣曉られぬと謀一
合らうち連立と馳て宿所は還つたその膏珠之双の母小のせうけは師の聖の仰
あり其大文字の復學とせん唐紙各十枚ありと大なる筆と準備せしむられ
村ありあるとけん價銀とと來所化達小買取らしてゆせんお怒る忘れたと
宣ひこのより家公まうとと寔一ゆるぬ欺く阿夏は知らぬ領をそ大造る
復學とる二箇のものをあらぬ凡作とも景市ともあつと秋言古のりるれが今

宵奥さる願ふてはせん。そとの價とてその楮毫を買ひてやうと向ふ珠之
 されど一人別銀之両と長老さるの仰られり。その美もあつるゆへ。その阿夏へ
 眉を擧めりてと云ふとどくも住持の分付ぬらむと申すハ論下りたるべし。と云ふ人
 云々と兎倉を告て九兩の銀と云ふと詰朝三箇の総角ホも速と云ふけり
 珠之ハハもあらぬ。凡作も景市も意中笑々受戴して草紙と共小袂推包
 搔抱を俱小宿所と云ふ傳燈寺へもどく。躬て山替の牧不赴のふを
 牧の童五六名を比呂口取衣合て汝達の豫より。認來ぬおんざらん。俺們的福富
 る凡作景市珠之ハハ村の友も。よと交を結んる。聊折乾を賣り
 受納せられ幸ひると。この紙小果を二両の銀を取れば。牧の童ホ合歡
 び。俺們何等の徳あり。稚子の友もせらる。や加以とひける。その下色とある。辭
 ちうさへは礼る。一所要あり何事まれ。美らん仰と。と叮嚀の志と。一々の件

銀と収め。凡作ホも亦欽び。俺們殊る望み。牧の馬を貸し。兼習と
 せよ。この件の牧童ホハ一談及びを美引てを。目力とふる。近屬牧志
 兼押。と馬のひ。いれ。るとも騎せぬ。と。の。躬。西。人。彼。此。走。去。
 一。程。の。わ。の。牧。の。馬。之。足。を。牽。と。來。の。鑣。子。を。被。け。鑣。と。取。て。三。箇。の。総。角。ホ。に。
 乗。と。ま。る。初。の。程。の。鑣。ホ。附。て。鞆。捌。た。と。鞆。あ。ろ。と。叮。嚀。小。指。南。と。徐。方。と。宗。と
 走。り。小。凡。作。景。市。珠。之。ハ。ハ。の。決。不。好。む。技。を。漸。く。日。數。を。経。隨。小。坊。ら。ん。
 優。美。騎。走。と。日。毎。小。遲。速。と。争。ひ。け。り。作。者。云。の。外。の。有。像。一。頭。ハ。第。一。輯。の。五。の。卷。の。
 是。より。先。小。阿。夏。ホ。ハ。の。嚙。昏。小。珠。之。ハ。ハ。の。水。と。濡。せ。幾。冊。の。草。子。を。抱。た。り。
 還。り。時。渠。等。復。學。の。大。文。字。と。云。ふ。と。豫。て。申。す。と。云。ふ。と。珠。之。
 此。の。也。騷。を。け。六。終。日。墨。を。搦。り。羽。衣。書。く。べ。の。と。云。ふ。と。云。ふ。と。青。を。過。せ。六。
 何。と。答。ふ。と。必。有。敷。系。小。宵。安。ら。ん。次。の。日。竊。小。凡。作。ホ。ハ。と。告。謀。一。合。し。く。又

七

黄昏不帰正来ると阿夏ハ遅いと俟つけて復学ハのふと詔る三箇の総角辨
有一此れハと云ふのなれ俺們終日精竭して穀のせ一行書と師の聖ふ見せ
まてり長老怒り罵りゆひく汝等が懈怠勝る這書さる何事ぞと云月平
年ハ十ヶ月習少くゆび書見てを宿所より去て福富殿ふられんハ
汝等よも吾恥へ噫益と敦圍く皆引裂衣捨きぬ俺們と云月比日
ある懈了のゆるけれも機嫌の折れ折れやあけん面目もなれと云と辭ひとく欺
なく俱ハ頭を搔くと阿夏ハ是ハ実語と云これハ白屬以さる欲凡さるも景
さる懲ゆひ友吟味と云之精を出しと云と云三人ハ阿唯々と安て軀て立と云
面と合舌と吐く庖福のゆふ退りハ夕饌食なるも阿夏ハその宵珠之双ホハ
いけるこの趣とあり夫婦ハ其報ハ大丈夫倉らち笑ひく童あらの正直る
現さる正のあけん師の長老の折檻ハ爰灼きより利方よりそれ懲る実を入れて

その後のこと習ハ紙筆ハのむろ費費とも惜らむと云と心く眷念せり然程ハ
珠之双ホハ只分釋の為のミ日毎傳燈寺へ赴けども習讀書ハよもせげも
亦早卒業習亦亦早卒業といあり寺ゆを走馬敷劍身運動せ
腰辨當とら倡る割篋の足の足と云とて御中謀りては銀のあふ任と彼
此酒肆よと下と酒食を食の餘を山懸の牧へをくとも彼童ハ
取らせ命然ハハ珠之双ホハ使れなりこれより珠之双軍の進退習と云
草刈る童ハ喚鳩めく牧の童と俱ハ士卒に擬らる身と凡作景市ハ大将ハ
擬へ馬小騎り相つれ送陣を布儲と木刀と挑と戦ハ追つ追れ日消を
奥あつふおひけり既ハ珠之双ホハ件ハ銀を酒食の用果せりも
飽と云と云と筆墨草紙の料ふと云親も老僕をも詐欺りて飲食に費ハ錢ハ
富家ハあは孫も富る家の癖を疑く林のめる只傳燈寺の法師ハ

の。これを知りて云々と長老は報せしむる住持の慈善と上目と人の悪を
 のよきも秘びぬる況や渠等の総角ををのくく福富へせし知せん大人氣
 年十五六のころもせみづら先非を悔死を知らぬ面色と謀々
 のこころを論しぬけり寔は出家の情状るべしされど這黄檗山傳燈
 寺の本堂の西のくつ閑帝の廟宇あり禪家の閑羽を祀るより昔後漢の普
 静長老玉泉山在せし時閑羽の灵を濟度志ありより唐の高宗の時勤
 州黄梅寺の五祖弘忍禪師の徒弟六祖神秀禪師抖擻行脚と玉泉山
 錫を駐め遂に伽藍を建立して閑雲長を祀りぬるこれより彼土のり本
 朝も亦黄檗宗の寺院中閑羽の廟を建てる事件の故実と傳えり
 閑話休題一日瓜作景市珠之友の這傳燈寺なる閑羽の廟は瓜作の
 碑打ち遊戯れを事果てする瓜作りて廟の闕尻うち掛る瓜作後

方と云うて吾子小のいも知らぬ抑這閑羽との猛者の漢土三國の時蜀漢の
 名将の初漢の世のいも亂れり討治んとき劉玄徳張飛と共に三名義を
 桃園に結びてを曩の師の長老の兒物語ぬるの大畧を言ふと瓜作の今俺
 們も亦三名年来志同うも骨内小異なるを後閑羽及び瓜作もるまて瓜作
 老朽を誘然らへ今あの像前ゆく拙言を正義を結び久後をも相忘れざる
 異姓の兄弟とあらま欲まの誤り同意せられぬと瓜作市も珠之友のい
 水像とんく閑羽の我も惜る當初彼曹操後瓜作の影も
 る蜀を佐けく只義勇の誇り一久終小呉人小謀れて綁首と刺れられた
 瓜作れぬもあれ俺們三名義を結び善惡共小辞さるる苦樂も等しく瓜
 作ら後瓜作も憑一の一味合體勿論瓜作瓜作飲む瓜作一月一日瓜
 作も先瓜生れを瓜とせん且その年歳と諸瓜作と珠之友の時十二瓜作

此作の秋生れ珠之友の冬生れりといふ又景市の二歳後れ。今茲を十一多られぬ。
 此作則配判して然らんゆかりの第一位の兄も。つぎ次の珠とのふとの次は景市公。
 と又の景市頭と悼む何ぞ百年歳の三少をもせせん百歳の公羽でも思ふものゆゑのよ
 り思ふ先やその像前ゆく大刀敷の勝負とて兄と敬ひ弟と信る甲しと定む
 べ。この小珠之友領なき。その誤宣ふ令へ。され錦も大刀敷も比皆是士空の所
 為され勝とのふも兄の徳を。且その処の本堂へ所化寮も遠く松の大刀立目と
 皆外もなれて福其外起りせん。そめその廟内小奉納の弓矢前ゆり弓矢前の大
 將の兵具を。これいそわれ武士なるものせゆらうとのふもあまを。とてのひらけ。
 廟内小進み入。柱小推乃で榊本登りて。掛るら。箭前を取却して。左右小扱を。
 兄弟達よ。皆の今。這前目的を。誰ゆもあれよく射るもの。第一の兄とせん。
 然るとは。物立目。皆を。これ彼以便宜の所。ゆゑの誤小後ひぬ。とのふれて。此作

景市の頭を。撫さ。苦笑ひ。と。そのふゆゆと。あれども。俺們のけきでも。射もとの。君は。
 之をゆゆとよせせや。とのふ。珠之友。荒介と笑く。弓矢前小疎。大将の器と。は。然
 ら。本事。と。死。を。折。争ひ。ある。との。辨。ゆ。言。如。月。の。下。沈。り。けれ。飯
 已。後。れて。天。飛。雁。は。ある。と。投。て。來。る。を。珠。之。友。估。と。瞻。て。今。彼。雁。の。言。る。中。ゆ。と。
 一隻。落。して。活。せん。を。とい。より。な。む。弓。小。箭。刺。之。仰。が。る。小。音。固。遣。も。過。さ。を。標。と
 此。彼。其。魔。差。の。心。一隻。の。雁。の。胸。より。背。へ。縫。留。ら。れて。弦。音。と。共。侶。と。地。上。は。着。羽。と。際。そ
 け。今。この。縛。の。為。体。小。此。作。も。景。市。も。擧。馬。死。感。下。手。と。巻。た。く。兩。人。齊。一。額。を。う。た
 俺。們。也。以。足。ら。ざ。れ。か。死。身。の。射。其。熱。を。提。れ。を。お。べ。と。れ。お。ひ。も。り。け。を。救。ふ。長。短。を。論
 せ。と。て。悔。れ。は。よ。り。兄。と。下。風。小。立。て。志。を。重。畳。べ。とのふ。を。珠。之。友。は。あ。の。い。の。い
 分。不。過。ら。り。心。の。と。さ。な。と。さ。ら。約。束。あ。れ。辞。ま。る。由。る。と。き。く。准。備。を。あ。め。ら。の。兩。人
 あ。ろ。ゆ。て。此。作。の。遠。く。身。を。起。一。走。り。ぬ。く。隕。る。雁。を。引。提。來。る。小。既。ゆ。く。と。死。死。

たり。その間小景市の廟内を染装の大土器を折敷と共に取出せ凡作の筋を抜
 びく雁の鮮血の竭きまぐ。土器不受さるる更小又件の折敷子雁を載て替と志
 傳形を改て閑帝を伏拜し鮮血を嚙り義を結びて珠之双を兄と敬ひ次凡作
 次景市異姓の兄弟と倡へる然り限りけり。此の地の出像も第一輯。登時珠之双
 弓笠前を又故のごとく廟内小掛飲め凡作亦其くや。雁をのら小措て道人亦
 怪められん然いごとく棄るの惜り。門前酒肆を頼まき煮て飽まてさうまを
 徑るれ五倍小任一のひびと心雁を播抱せ立寄ると大土器の血凍るるを
 下と左も小取てた久の墓所のやとの垣小結れ竹葉取の中を棄るけり。却説光
 陰社并々阿夏母子の福富の宿所小存と四とせあまのそや五稔子あり一珠之
 双と十三歳あり大土次が孫女黄金十一のをりけり。され阿夏正月のちよ心

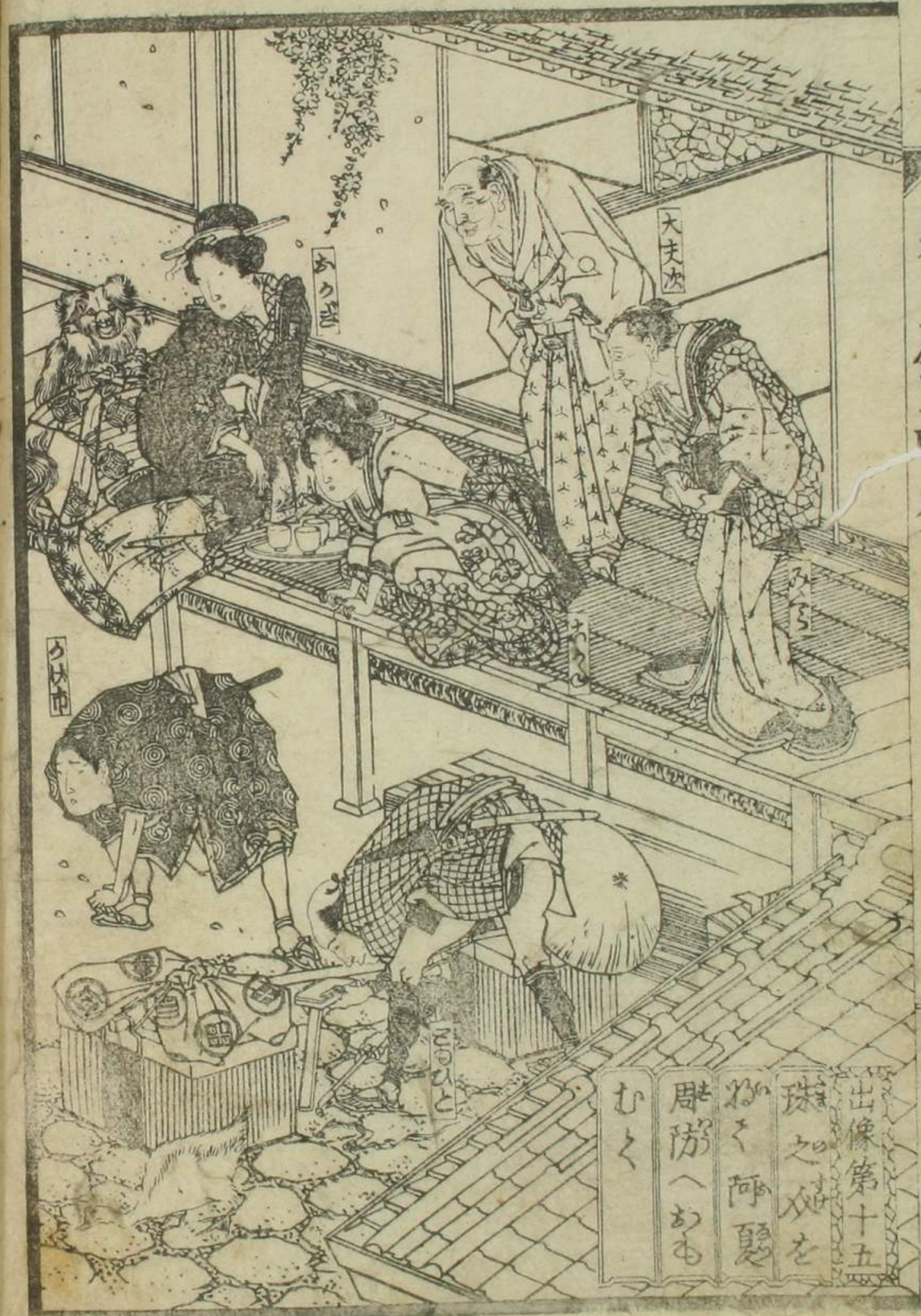
ひとちよ心あり。つが身圖らびの氣は逗留とより既小を五をの春を迎へる。あつ夫
 婦の親切き始終のゆるよりありとも久死と死の初は似む六日の昔日蒲とる。此
 るての人のあらへ瀬十郎は別れよりそや十あまの一稔の長死月日を歴れども尚
 其る齡の七恙あまのあまの。つが身とまればかも珠之双の彼女の正死境であは
 り。一ト周防へ赴き。そやせむせむせむの親り子と申斐もあれらのる。豫あり
 少不定る彼地小異なるまありとも身野さうの草枕旅子命の終るとも。あまの
 ひ決めしむる止る。後までも冥土の障りよる。二月の比音途せん。とあまの
 それとある。珠之双は説示せらる。春二月の比音。一叔大土次と屯倉亦に輝云と
 別を止て身の暇を請ひく。あまの夫婦黄金さうり。別を惜て一日と留は
 程。春も三月のりけり。あまのあまの。阿夏と大土次亦はさうり。ほ

よき生口つひ何とせん情もあはれも似れぬ珠之奴が親類を周防の叔父より
 外に侍らざるを春面之夕夢ゆえに心あがり頻りにもまき欲するの道祖の神
 訪引せぬ後一トび彼地却て叔父公を對面するに時宜し依り立ちて
 御庇祈すとのありと云定めぬや枉ぐ放ち遣はせぬ言此の情あると辭盡
 きて已され夫次屯倉阿健之今ゆふ禁ゆるそとあらん力及んず黄金の身は丹
 精ゆく奥印可まてぬうしき得教えよとゆふ由り首途の準備美ゆとせやに
 兼引の阿夏ぬめ珠之奴中如此々と告て起行を急ぎ既而て翌日
 一室を招きよせて屯倉阿健黄金をも俱に別の不意勧めの久後は
 慰めける語次は夫次がけりや官采不測の値偶より苟且る満四歳列るを
 交参ひり過世ありとのあるそ況黄金の糸竹の技をも教られて都のまがを會

得たる全かん身の資に依れり流が為師あり弟子も年々親類今も
 たるままで別を惜む流が心は推量せられん知らず如く大夫五が在処今に
 知る由もる世に死人を以て絶てぬの來ぬとて心當りせられぬ然りと世継の
 りを眷念せざるあり黄金も今茲の十一の多の西年俟つけ招塔せんと
 此の丸作も景市もみる類の流るれ流るるものと農家とるに死性
 わびる届けられたるもあれは流るる優さぐありありの息子の眉目美く
 女子のしとせ欲し億億買はれ是も亦農家と相心ぬねと年来黄金と
 中より童男童女の差別る遊戯をのけれ屯倉阿健と商量するに黄金
 金ぐ兄弟の本取替させらるる後々も憑りぬんとする屯倉も共侶の幼穉
 時と妹と仗の縁もよく結びて送る年長人と成て外は優華のそと未
 遂ぐ世の世の類ゆめむと兄公と俱妹と喚び人と成るの後々も障り

あつと思ふ事と。阿健も正首の良人夫妻と妹と呼ぶ。即女弟の擬へる親よ
 由る故と然波然然ら夫婦と妹使との兄と妹の義多らん。あれれよのわき
 同胞も黄金が為る後々まの背盾の頼んとその所初め信り。その意を
 とす。論まへの誠は阿夏の親を改め。数中も足る珠之友を然まよ
 ん慈愛の辱き。翌より別れ。山海万里に隔る。一に結び好む。信り
 考つる。宿所信り心地のまづれ珠よ。虚々外視を。今の仰を。教
 黙る。大夫次は完る。阿夏女郎即坐。心せられ。甲斐ありて満足せ
 る。阿健不意を。阿健あり。恥て黄金と珠之友。兄妹品不意酌。
 共侶。後信り頼り。且々大夫次の準備の金拾両を。紙に載て
 これを阿夏の贈り。最些少もあれ。賤進り。其の寡なる謂り。

西の東の旅路の護摩の灰と。喚做さる。騙見ても。人害と。盤
 纏と。山家も亦。思ひ。腰の金と。是殃危哉
 招く。周防の便り。速に帰来。性急の路。這拾金
 母。一箇の要。五兩の珠之友の腰に巻。分ち置。めれ。の
 故。誰何と。萬一路。禍あり。母の金と。奪。五兩の幸。只
 これ。奸智の長。騙見。十五。足。反。総。角。金。腰
 せ。懐を。視。被。心。定。思。案。財。進
 其の。後。説。論。長。要。取。其。受。載
 優。御。親。切。の。見。賤。寡。路。の。用。送
 教。諭。の。背。珠。之。友。の。唐。著。纏。く。送



美山生金二軒巻一

出像第十五
 珠之双を
 かく阿夏
 群防へおも
 むく

一箇の財妻の。其身の懐は。大いなり。大夫次ら。これでも。息子の。鐘の。と。
ゆて。懐披く。人。要譚。且。果。倉。作。何。景市。も。召。
丸居。加。物。食。せん。と。俗。の。習。朋。輩。遊。敵。の。け。れ。ま。と。別。れ。惜。ら。ぬ。
と。景市。も。召。取。食。け。り。然。程。丸。作。景市。の。珠。之。女。母。と。共。遠。く。周防。へ。赴。き。
皆。日。より。別。れ。惜。き。是。首。立。彼。首。取。合。す。の。の。耳。を。今。の。園。等。
招。れ。本。意。ある。と。お。し。と。わ。り。夫婦。の。目。前。で。支。改。り。酒。膳。の。飲。食。を。ま。ま。
ろ。不。任。せ。た。の。の。難。と。く。痿。痺。と。持。の。の。人。の。背。を。看。ふ。と。珠。之。女。と。耳。を。
目。注。ぐ。も。果。長。坐。坐。給。困。と。も。長。閑。日。影。も。此。彼。の。の。譚。は。時。移。り。と。
黄昏。ま。なり。の。阿。夏。の。屢。不。盡。辞。と。珠。之。女。と。共。侶。の。遠。退。を。妻。の。首。途。の。
物。集。用。意。不。更。闌。と。の。夜。を。果。敢。なく。曉。け。り。前路。の。も。豫。も。大。丈。冷。

指揮。陸。新。関。の。障。わ。ん。水。行。と。と。定。め。り。の。老。実。多。一。箇。の。小。厮。浪。速。の。
南。も。送。れ。と。これ。の。准。備。も。あ。り。け。り。又。丸。作。と。景市。の。欠。礼。畑。ま。で。送。ら。ん。と。
共。侶。不。起。出。く。食。共。侶。朝。出。立。の。箸。も。心。の。共。い。を。死。と。よ。も。う。と。黄。
金。も。未。明。の。臥。房。を。出。く。大。父。大。母。の。坐。邊。に。り。登。時。阿。夏。珠。之。女。の。行。装。を。整。
へ。と。夫婦。阿。健。母子。の。餘。年。来。親。り。け。り。奴。婢。も。別。を。生。じ。島。に。森。を。
離。比。草。鞋。と。笠。と。と。遠。く。送。入。を。後。へ。立。身。折。戸。口。の。丸。作。も。景市。も。身。
装。と。俵。も。又。縁。頼。の。の。と。の。を。盡。く。大。丈。次。倉。阿。健。黄金。の。奴。婢。居。
又。皆。再。會。と。契。り。目。送。る。人。も。の。共。名。残。を。樓。に。有。敷。の。山。
里。花。の。宿。と。る。心。地。と。有。一。嘆。息。を。け。り。畢。竟。阿。夏。珠。之。女。も。遠。く。
周防。へ。赴。き。又。甚。麼。多。話。説。の。の。を。次。の。巻。の。解。分。を。聽。ひ。か。し。

